

第4章 総括

第1節 豊後府内出土の彫三島茶碗について

16世紀後半、豊後国のみならず、九州六ヶ国の知行権を得た大友義鎮（宗麟）は、領国経営の安定化をはかる方策のひとつとして、ポルトガル船の入港を求め、自らも中国南部や東南アジアに船を出すなど、南蛮貿易を積極的に行った。その状況は、平成9年から始まった、中世大友府内町跡の発掘調査で多量の中国や東南アジアの陶磁器が出土することで、理解することができる。

また、天文20年（1551）、筑前国博多の博多浜を支配していた大内義弘が陶晴賢に殺害され、大内氏が滅ぶと、それまで、北側の息ノ浜を支配していた大友氏が、博多浜も支配下に置くようになる。このことで、朝鮮半島と交易を行っていた博多商人と豊後府内に拠点を置く大友義鎮のつながりがより緊密になってくる。このことを象徴するかのよう、豊後府内の発掘調査では、各調査区で、朝鮮王朝産の陶磁器が出土する。特に、茶道具として使用された可能性のある蕎麦や斗々屋と呼ばれる茶碗や舟徳利の出土が目立つようになる。

これまで刊行された、豊後府内の発掘調査報告書で報告されている象嵌青磁や紛青沙器等を含む朝鮮王朝産の陶器は約270点に及ぶ。そのうち、最も多いのが蕎麦や斗々屋と呼ばれる碗や皿の口縁部や底部で、約150点が報告されている。また、同時期の遺物である船徳利も約70点が報告されている。こうした遺物の出土状況は、数量の差はあるが各調査区で出土するものの、特に目立った出土状況を見せる場所が2ヶ所ある。そのひとつが、大友館の東北部、唐人町の南にあたる桜町北部の府内町跡12次調査区から南に隣接する18次西調査区である。そしてもうひとつが大友館の南西部に位置する林小路町である。この約150点の碗や皿の中に9個体の彫三島が含まれる。

こうした茶碗は一括して高麗茶碗と呼ばれ、すでに16世紀後半の日本各地の遺跡の発掘調査でも出土することが報告されている。天正元年（1573）の織田信長の焼き討ちを下限とする朝倉一乗谷遺跡や天正13年（1585）を下限とする長浜城下町下村邸下層町屋などの他、朝鮮半島と直接交流する博多でも報告されている。数量の問題はあるものの、すでに日本に一定量の蕎麦や斗々屋と呼ばれる茶碗がもたらされている。^{注1}

そうした中、これまでの茶陶研究での招来時期と矛盾が生じているのが彫三島茶碗である。この茶碗の招来時期について、これまでの茶陶の研究では、文禄・慶長の役の後、朝鮮王朝との国交が回復した慶長14年（1609）以後、日本から注文生産され、もたらされると考えられている。その一方、谷晃は彫三島の招来について、名称が文献史料にないことや、発掘資料に1600年頃のものがあることから、すでに早くから輸入され、茶会で使用されていたにもかかわらず、独自の名称を与えられなかったためと指摘し、時期が遡る可能性を述べている。^{注2}

ところで、遺跡としての豊後府内である中世大友府内町跡は、高麗茶碗が出土する頃から、とりまぐ状況が急激に変化する。永禄年間（1560年代）に後に第2南北街路沿になる場所に大型土坑や廃棄土坑が掘り込まれ、その直後の万寿寺の堀が掘削・拡張される。そして天正初年頃、桜町や主要街路の整備を始め、大型土坑や万寿寺の堀は埋め立てられ、屋敷化や街路化する。しかし、天正14年（1586）には島津氏が侵入し、豊後府内は灰燼に帰す。また、文禄2年（1593）に大友氏は豊臣秀吉から徐国に降参する。さらに慶長7年（1602）に近世の城下町が竹中重利により整備され移転する。こうした中、第432図に図示した9点の彫三島茶碗は豊後府内に招来される。

1は府内町跡5次A調査として実施した林小路町、2はその東側の第5次B調査区の整地層・包含

注1 稲垣正宏・鈴木裕子「日本出土の高麗茶碗」『高麗茶碗－論考と資料－』高麗茶碗研究会 2003年

注2 谷晃「高麗茶碗概説」『高麗茶碗－論考と資料－』高麗茶碗研究会 2003年

層からの出土である。一緒に出土する遺物は、16世紀後葉から末葉の時期が多く、一部17世紀代のものも含む。資料の口縁部は内外面とも上位に二条の線があり、その下位に二段の檜垣文が施文されている。2は胴部の資料であるが、内外面とも三段に区画され、外面は上位二段に檜垣文、内面は上位一段に檜垣文、見込みに近い下位二段に花文のスタンプが施文されている。

桜町 3は桜町のSX034とした16世紀後葉の遺構からの出土である。調査は府内町跡9次調査として実施した。SX034は天正14年（1586）の島津氏侵攻に起因すると考える焼土層下の遺構である。しかも桜町はこれまでの調査で、16世紀後葉に大規模な土取り事業が行われ、すぐに埋め立てて、桜町と第2南北街路の整備がほぼ同時に始まっていることが判っている。そして天正12年の頃の状況を描いたと考えられている「府内古図」に桜町は記載されていることから、この彫三島もそれ以前にもたらされたと言える。資料は底部近くで、外面は底部近くが無文で、上位に檜垣文がある。内面も上位に檜垣文があり、見込みの花文のスタンプがある部分との間は二条の線で画される。器形は、1・2に比較すると、器高が低く、平茶碗のような形態を示す。

上町 4は府内町跡10次調査として実施した、第4南北街路沿いの上町からの出土で、遺構は16世紀第4四半期後半と考えられるS218土坑である。同一個体の口縁部の破片がまとまって出土しており、黒地に白色の化粧土で檜垣文が内外面とも二段に描かれているのが確認できる。口径は16.6cmで、他の彫三島が緑灰色をしているのに対し趣が異なる。

第2南北街路 5は府内町跡34次調査として実施した万寿寺の西側の第2南北街路上面で出土したものである。外面は三段に区画され、上位二段に檜垣文があり、内面は四段に区画され、最下段の見込み以外に檜垣文が施文されている。この資料の口径は14.1cmであるが、他に比較すると器高が低く、3と同様平茶碗のような形態になると考える。

万寿寺の堀 6は、本書54頁や巻頭カラーで報告の通り、万寿寺の堀を埋め立てる際に、埋め込んだもので、上面に天正14年（1586）の島津氏侵攻時に起因する焼土層が被う。この遺構は、天正10年（1582）の文書に「万寿寺築地之内并西之屋敷両所・・・」^{注1}として表現される場所と考えられており、埋め立てられ屋敷地化している。この彫三島が出土した場所から南に200m離れた府内町跡34・43次発掘調査区では埋め立てられ堀の上面に礎石建物が検出されている。この彫三島はそれ以前にこの招来されていたことになる。

資料は口径14、底径5.0、器高6.2で、外面は四段に区画され、最上位を無文帯にし、最下段の上位から二段目にかけて、区画線は無視するように檜垣文が豪快に施文されている。底部の畳付き部には目跡が四ヶ所残る。内面は、五段に区画され、最上位は無文帯で、その直下の段のみに檜垣文が描かれ、三段目から見込みにかけて、三段にわたり、花文のスタンプが施文され、環状に目跡が付く。

万寿寺の堀 7・8は府内町跡60次調査で出土した小破片である。6と同じ状況で万寿寺の堀の埋め立て土からの出土で、南に約80m離れた位置である。7は口縁部、8は胴部であるが、それぞれ、内外面に彫三島の特徴の檜垣文と区画線を見ることができる。

ノコギリ町 9は府内町跡77次調査とした万寿寺西側にあるノコギリ町の調査区である。出土位置は、近世水田状遺構からの出土である。資料は胴部の破片であるが、内外面に横方向の区画線があり、内面は上下に、下面は上位に檜垣文が施文されている。

以上のように、中世大友府内町跡出土の彫三島の出土状況は、9を除き、概ね16世紀後葉から末葉に位置づけられる。中でも天正14年(1586)の島津氏侵攻時を起因と想定する焼土層下の出土である3、天正10年の文献史料に登場する屋敷地の下層から出土し、さらに島津氏侵攻時の焼土層に被われた5・7・8は、埋設年代が想定でき、天正年間の最初の頃には、豊後府内にもたらされた可能性

注1 大分県史料刊行会「大友松野文書」『大分県史料25』1964年

が強い。

赤沼多佳

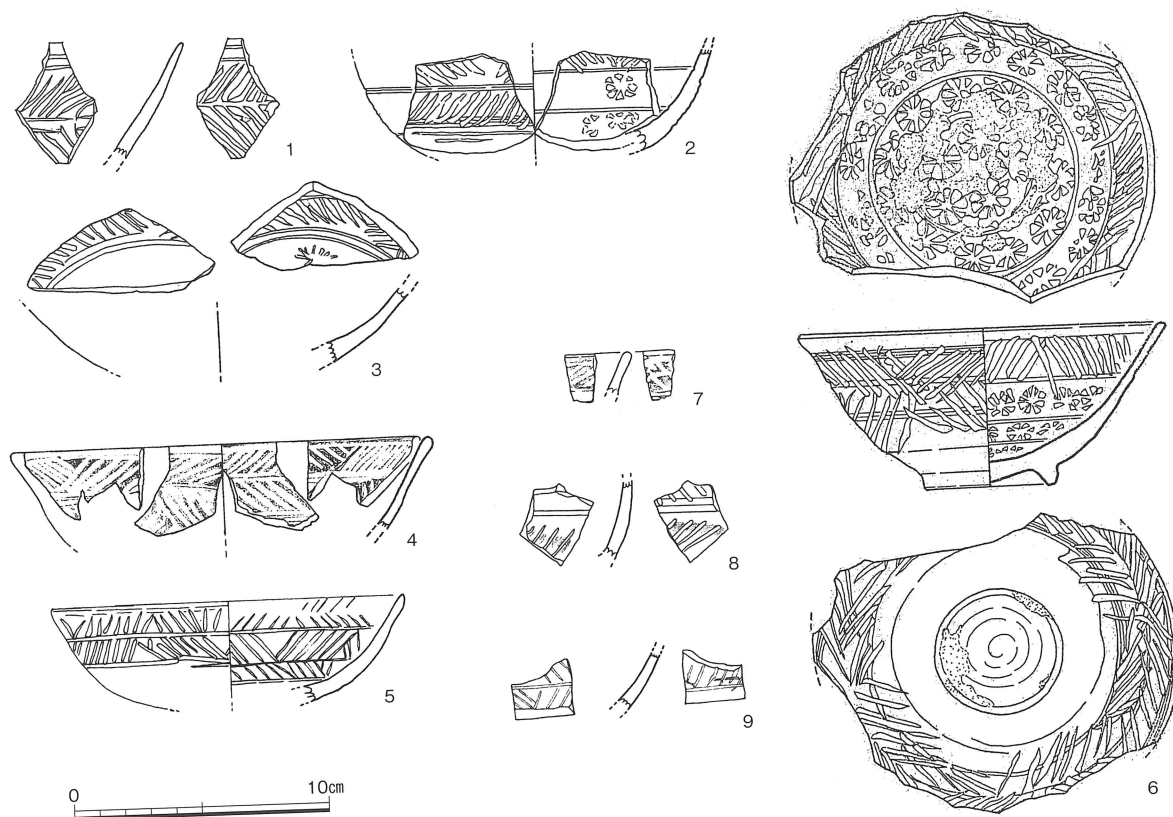
片山まび

豊後府内は、17世紀初頭で、中世都市としての役割を終了する。そうした状況下で出土する豊後府内の彫三島茶碗の招来は、発掘調査での年代観から見ると、1570年代末に遡る可能性を持つ。赤沼多佳は茶の湯の道具としての「伝世する高麗茶碗を大別すると、見立てられた茶碗と日本からの注文によって造られたものがある。」^{注1} また片山まびは朝鮮陶磁と日本の茶の湯茶碗について、分析を行い、「口径一八cm～二〇cm前後、高一〇cm以上の製品が多い朝鮮陶磁とは一線を画する。とりわけ十七世紀になると朝鮮陶磁の一般的な法量から離れて、口径一三～一六cm、器高六～一〇cm前後の日本の茶の湯に適した法量へと定型化をとげていく。」と茶の湯用茶碗の法量に一定の規格があることを導き出している。^{注2}

こうした高麗茶碗の研究成果から豊後府内で出土する蕎麦や斗々屋と考えられる茶碗を見ると、口径を計測したものは約60点報告されている。これらは、片山の分析する口径13cm～16cmの範囲に2～3点を除き含まれる。また器高の計測値は26点が報告されており、4～7cmの範囲で、ほとんどが5～6cmである。この中に彫三島茶碗も含まれる。

こうした豊後府内の茶碗は、朝鮮半島にある大振りの茶碗の中から、茶の湯用の茶碗として「見立て」られ、選別されて、持ち込まれていた可能性が強い。また、彫三島茶碗は朝鮮半島での高麗茶碗の伝統の中に、檜垣文を見いだすことは出来ず、日本からの注文品と論じられている。豊後府内出土の彫三島茶碗は、朝鮮半島での日本向けの注文生産が1580年以前に遡る可能性を示すと言わざるを得ない。

注文生産



第432図 豊後府内出土の彫三島茶碗

注1 赤沼多佳「高麗茶碗」『東洋陶磁史—その研究の現在—』東洋陶磁学会 2002年

注2 片山まび「韓国陶磁史における高麗茶碗」『茶の湯 名碗』徳川美術館・五島美術館 2000年